岡村政子《木靴を履いた西洋婦人》

明治の時代に「女性水彩画家」が居たとは！

この画家の名前をご存知の方がいらっしゃったら、余程の勉強家か、正常な「教養の高い美術好き」の域を通り越していらっしゃる方！（異常な方!?）

岡村政子は安政五（一八五八）年生れ、明治九（一八七六）年、工部美術学校の第一期生として入学、（その後、中退）また、ニコライ神学校にも学んでいるので、「山下りん」のような聖像画家かというと、そのようなことは無さそうである。

現在、残っている作品は非常に少ないといわれており、その点、本作品は大変貴重と思われる。それにしても、皆さんご覧になって、仲々の腕前と思いませんか！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

岡村政子《 木靴を履いた西洋婦人 》
水彩・紙　34.5 × 15.5cm　1900 年頃
Okamura Masako *A Western Woman with Her Sabots*

岡村政子（おかむら・まさこ／1858 － 1936 年）
信濃生れ。ロシア正教会に学ぶ。1876 年工部美術学校入学、フォンタネージに師事。石版印刷技術を学ぶ。78 年中退。夫は石版版下画家・岡村竹四郎。美人画、風俗画を制作。女流石版画家のパイオニアの一人。1936 年没、78 歳。

浅井　忠《さくら》

浅井の亡くなる二年位前の京都の「加茂川風景」か！

『浅井忠画集』にある《加茂川風景》（一九〇五年／明治三八年頃制作）によく似た色づかい。この絵の元所有者は、慧眼と、独自の見識を備えておられて名高い某氏（故人）。その後、未亡人が受け継がれたこの作品、更に縁あって、近年、私の許へ。

かく申す私、己の分際もわきまえず「日本水彩画」のコレクター（勿論、最末席の）を任じており、そんな当方といたしましてはこの作品を入手出来たこと、大変幸せ！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

浅井　忠《さくら》
水彩・紙　13.7 × 23.4cm　1905 年
Asai Chu *Cherry Blossoms*

浅井　忠（あさい・ちゅう／1856 − 1907 年）
江戸生れ。1876 年彰技堂で学び、同年工部美術学校に入学。78 年十一会を結成。89 年明治美術会創立に参加。98 年東京美術学校教授。1900 − 02 年渡欧。02 年京都高等工芸学校主席教授。03 年聖護院洋画研究所創設。関西美術院長。京都で没、51 歳。

金山平三《樹》

金山は、やはり、孤高の「樹」！

文展入選の《氷すべり》で名高いが、その後（画業の中期以降）は、官展とは絶縁。孤高の道を歩んだ。
金山は作品の数も少ない（かつ高価）。
そのような中、小さな水彩画ではあるが、この絵を入手出来たのは幸せ！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

金山平三《 樹 》
水彩・紙　24.3 × 16.0cm　1915 年頃
Kanayama Heizo *Trees*

金山平三（かなやま・へいぞう／1883 − 1964 年）
神戸市生れ。1909 年東京美術学校西洋画科卒。12 − 15 年渡欧。16 年文展に初入選、特選。17 年文展で特選。44 年帝室技芸員。57 年日本芸術院会員。東京で没、80 歳。

後藤工志《柿日和（かきびより）》

「相州」とは古風な！　三六歳の若さで夭折の水彩画家。

後藤工志は、一般的にはあまり知られていない。それは、三六歳の若さで亡くなっており、世に出回っている作品の数が少ないゆえもあると考えられる。

いずれにしても水彩画の名手。各地の美術館で催される「日本の水彩画展」には欠かせない画家ではあるが、必ずと言って良い程、東京国立近代美術館所蔵の《相州真鶴附近風景》が出品されている。

ところで、この絵も東近美のものと同寸法、それにこの水彩画の裏面にタイトルと共に「相州秦野」と、鉛筆で書かれている。

松尾陽作（千葉県我孫子市）

後藤工志《 柿日和 》
水彩・紙　37.2 × 53.2cm　1920 年頃
Goto Koshi *A Good Day for Persimmons*

後藤工志（ごとう・こうし／1893 － 1929 年）
東京生れ。1908 年日本水彩画研究所で学ぶ。11 年太平洋画会展、文展に入選。13 年日本水彩画会の創立に参加。14 年光風会展に出品。16、17 年今村奨励賞、18 年光風会会員。28 年帝展に水彩で特選。29 年没、36 歳。

三宅克己《湯ヶ島》

一〇〇年（推定）前の水彩画、今でも色、鮮やか！

三宅は少年の頃（明治期）来日したイギリス人画家、ジョン・ヴァーレイの水彩画の展覧会を観て「俺も画家になろう、それも水彩画家になろう！」と堅く決意した、と自伝『思い出づるまま』に記している。

ところで、水彩画は一般論としては、脱色退色しやすいと言われている。しかし乍（なが）ら、この絵は大きさも大きく、かつ描いて一〇〇年以上（推定）経っているのに色鮮やか！

その筆触といい、色づかいといい、水彩画の良さを十分に出している「傑作」を入手出来たと一人、悦に入っている次第！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

三宅克己《 湯ヶ島 》
水彩・紙　53.5 × 72.8cm　1908 年頃
Miyake Kokki *Yugashima*

三宅克己（みやけ・こっき／1874 － 1954 年）
徳島市生れ。大野幸彦（改姓前は曾山幸彦）、原田直次郎に師事。1897、98 年渡米、渡欧。99 年白馬会会員。1908、09 年文展で三等賞。12 年光風会創立会員。15 年文展二等賞。51 年日本芸術院賞恩賜賞。真鶴で没、80 歳。

小山周次《井之頭池》

井の頭公園も、ことし（二〇一七年）で開園して、ちょうど、一〇〇周年。

この道に詳しい勉強家の人でさえ、この「小山周次」の名前をご存知の方は少ないのではないか！　ましてや、同氏の絵（作品）を見るのは、初めてという方が多いのでは……。第一法規出版の『日本の水彩画』の第二巻には、この「小山周次」が採り上げられています。（第一巻は「大下藤次郎」）

先年、たまたまこの色鮮やかな水彩画を発見！

描写力、色彩感覚ともになかなかのものと、皆様、お思いになりませんか。

松尾陽作（千葉県我孫子市）

小山周次《 井之頭池 》
水彩・紙　37.5 × 55.0cm　1935 年頃
Koyama Shuji *Inogashira Pond*

小山周次（こやま・しゅうじ／1885 － 1967 年）
長野県小諸生れ。1900 年小諸義塾で島崎藤村、三宅克己に学ぶ。02 年丸山晩霞に師事。10 年日本水彩画研究所入所、11 年幹事。13 年日本水彩画会の創立に参加。評議員。17 年より二科展に出品。東京で没、82 歳。

青木　繁《桜》

桜

デッサンと水彩が表裏になっている桜。横浜大岡川の観桜を何よりの楽しみとしている私にとって何より惹かれるモチーフでした。

デッサンには「青木繁作たるを証明す　坂本繁二郎」の識があり、作画されたのが「青木奇跡の一九〇四年」と推定されるというのも魅力的でした。

二人のミドルマンとしての梅野満雄氏の青樹社売り立てカタログでは水彩画面のみ記載されていますし、一九七二年、東京と久留米での生誕九〇年記念展にもトリミングされた水彩のみの写真が出品番号一四四として図録にあります。

この作品は表裏を見ることで評価における技法の意味や画家をめぐる人間関係等をまさに身をもって語る絵画史となります。

横山俊樹（神奈川県横浜市）

青木　繁《桜》

（1）鉛筆デッサン・紙　18.6 × 11.0cm　1904 年
（2）水彩・紙　18.6 × 11.0cm　1904 年

Aoki Shigeru *Cherry Trees*

（1）

（2）

青木　繁（あおき・しげる／1882 － 1911 年）

福岡県久留米市生れ。1899 年上京、不同舎で小山正太郎に師事。1903 年第 1 回白馬会賞。04 年東京美術学校西洋画科卒。07 年東京府勧業博覧会で三等賞。08 年九州を放浪。福岡市で没、28 歳。

河久保正名《林金兵衛肖像》

自身の死を意識し画家に描かせた肖像画

病魔に侵されているのであろうか？　落ち窪んだ目に私の視線は動きを止めた。

私はこの肖像画を見たとき、一瞬、高橋由一の《花魁（美人）》を思い出した。由一作品はモデルの職業柄派手な髪飾りや衣装をまとっているが、正名の《林金兵衛肖像》は地味である。しかし、その迫力は凄まじい勢いで私に迫ってきた。一方、「ダブル・インパクト　明治ニッポンの美展」で間近に見た《花魁（美人）》は、画面が平面的で塗り絵のように感じたのは私だけであろうか？

《林金兵衛肖像》を見ると、暗い背景の中に人物の顔が浮かび上がって見えるので、自然に顔に視線が誘導される。さらに顔を見ると、眉間の皺、濃い眉毛、瞼の上の力強い輪郭線、輝きのない瞳、豊麗線、しっかり結んだ口元などが、芯の強い人物像を作り上げている。

因みに林金兵衛は、明治一三年頃愛知県東春日井郡長として、当時の地租改正反対運動の中心人物として活動した。当時、福澤諭吉と親交があり、指導を受けていた。なお、肖像画は明治一四年一月に制作され、金兵衛は同年三月一日に没していた。このことからも自身の死を意識していたと思われる。

一方、作者の正名は明治美術会で審査員を務めるなど活躍したにもかかわらず、生没年不詳と謎めいている。また、作品のうち水彩画については、小杉放菴記念日光美術館に収蔵されているが、油彩画は私の二点を含め三点しか確認できておらず、研究資料としても貴重な逸品である。

佐々木征（千葉県船橋市）

河久保正名《 林金兵衛肖像 》
油彩・板　54.0 × 42.0cm　1881 年
Kawakubo Masana *Portrait of Hayashi Kinbei*

河久保正名（かわくぼ・まさな／生没年不詳）
東京生れ。1874 年頃、国澤新九郎に師事。90 － 98 年明治美術会展に 7 回出品。96 年頃、印刷局勤務。1900 年パリ万博に出品。02 年巴会に参加。03 年第 5 回内国勧業博覧会に出品。06、08 年太平洋画会展に出品。

松原三五郎《富士遠望図》

子弟一二五七名を養成した天彩画塾開設者

一点は気に入った富士山の絵が欲しいとの思いがようやく叶った。画家の品格であろうか、画面全体に漂う穏やかな雰囲気が、私の思いにぴったりと一致した。私はこれまで数多くの富士山の絵を見てきたが、残念ながら気に入った絵はすでに美術館などに収蔵されていた。市場に出回っているものには、メガネに叶った絵が見つからない状態が何年も続いた。それでも諦めずに出会いを待った結果、手元の《富士遠望図》を入手することが出来た。

絵は中央に雄大な姿の富士、中段には左右から松林を配し、中央部分から湖面や入り江が見通せる構図である。さらに富士山と松林を引き立てるためか、手前の草地は左右からなだらかに傾斜し、合わせ目の低地は左方向から中央に向かい変化を持たせている。また、富士山にかかる雲は、敢えて富士の全体像を見せないことで、鑑賞者に自由な想像をさせる楽しみを残している。

因みに三五郎が、手元の作品に唯一「SANGORO」のサインをしたことに注目している。私はこのことから、手元の《富士遠望図》は注文を受けて制作したと考えている。その根拠は多少不安も残るが、通常、「三五」とするサインを注文主に敬意を表し本名の「三五郎」としたと推測できるからである。

ところで、私は「松原三五郎と子弟展」等の開催を熱望しているが、今のところその情報はどの美術館からも入ってこない。実に残念なことである。

佐々木征（千葉県船橋市）

松原三五郎《 富士遠望図 》
油彩・キャンバス　60.7 × 91.2cm　1916 年
Matsubara Sangoro *A Distant View of Mt. Fuji*

松原三五郎（まつばら・さんごろう／1864 − 1946 年）
岡山市生れ。初代五姓田芳柳に師事。1885 年岡山で画塾・天彩学舎を開設。90 年大阪師範学校に転任。94、96 年関西美術会を結成。1901 年同会を京都に移す。04 年天彩学舎を天彩画塾と改称。大阪で没、82 歳。

三迫星洲《花を摘む朝鮮の少女》

戦前の満州で活躍した幻の従軍画家

入手のきっかけは、眼下に広がるパノラマ的視点の異国風景に強い衝撃を受けたことである。絵を見て最初に目についたのは、朝鮮民族衣装をまとった三人の少女が山の斜面で花を摘んでいる姿である。画面には馬（？）で荷物を運ぶ民族衣装の男や画面中央には、民家らしき屋敷が描かれている。さらに視線を上部に移していくと、右側の山から左側に向かって線路があるようだ。沢山の人物がトロッコで鉱物を運んでいる姿が描かれている。推測するに赤茶けた山肌は、鉱山の採掘跡のように思われ、引き続き場所を移し採掘中であることが、働く人物の多さから容易にわかる。

購入時にはサインからみて女性画家の作品と思い込んでしまった。それはサインが「S.MISAKO」とあったためである。その後、女性画家を調査したが、作者特定はできないまま数年経過してしまった。

ところが「わの会放談会」に会員のF氏が持参した《北京の角楼》の作者が、何と私が探しても突き止められなかった「三迫星洲」であった。しかし、F氏も戦前に三越で販売された絵葉書を所蔵されていたが、生没年等は不明とのことであった。さらに、神奈川大学外国語学部中国語学科教授彭国躍氏も「幻の従軍画家三迫星洲―戦前絵葉書による図版の整理と分析」のテーマで発表されていた。しかしながら専門家の手を借りて調査したが、星洲の詳細は不明であった旨の回答をいただいた。星洲は雅号なのか本名なのか謎のままである。

佐々木征（千葉県船橋市）

三迫星洲《 花を摘む朝鮮の少女 》
油彩・キャンバス　61.0 × 85.0cm　1917 年
Misako Seishu *Korean Girls Picking up Flowers*

三迫星洲（みさこ・せいしゅう／生没年不詳）
従軍画家、探検画家と称した外地風景風俗絵葉書で知られる。取材地は、1917 年朝鮮半島、31 年露満国境ゴビ沙漠、32 － 33 年満州事変従軍、34 年南洋諸島、35 年満州、36 － 37 年北支、39 年台湾、40 年大東亜共栄圏の東南アジア各地。

都鳥英喜《ベニス　サンマリア寺》

「風景に佇む画家」の渾身作に出会う

都鳥英喜作品との出会いは、まさに美術館での作品鑑賞術（？）を活用できた好例である。書き出しから唐突であるが、理由はその訳を聞けば簡単に理解できると思う。それでは私が以前、佐倉市立美術館で開催中の都鳥英喜展を見たときの実際の行動パターンを紹介しよう。私の鑑賞スタイルは、ある程度の速さで館内の作品を鑑賞しながら進み、自身の気に入った作品の前では、じっくり作品の隅々まで徹底して記憶させるというもので、そうした楽しみ方を数十年続けている。勿論、年齢による画風の変化を見逃すことはない。さらに館内は最低三回ほど周り、その中で特に注目した作品は、画風を記憶するように訓練してきた。勿論、気になる作家の展覧会は図録を購入し、その後も時折図録を開き、鑑賞時の感動と記憶を呼び戻すことにしてきた。

手元作品との出会いを例にとれば、出会った当初は作者不詳状態であった。絵を目の前にして、すぐに英喜の画風が頭によみがえってきた。さらにサインを確認すると、滞欧時に使用していた一見、外国人のような名前も合致していた。都鳥英喜作品発掘のケースは、私が長年かけて続けてきた訓練の成果と位置付けている。

因みに佐倉市立美術館には、《ベニス風景》大正九年作が所蔵されており、手元の作品と同時期にベニスで制作されたことがわかった。私のささやかな希望は、いつの日か二作品が一緒に展示される日が来ることを楽しみに待つことである。

佐々木征（千葉県船橋市）

都鳥英喜《ベニス　サンマリア寺》
油彩・キャンバス　43.5 × 63.5cm　1920 年
Totori Eiki *The Basilica of Saint Mary, Venice*

都鳥英喜（ととり・えいき／1873 − 1943 年）
千葉県佐倉生れ。浅井忠に洋画を学ぶ。1891 年明治美術会会員。1901 年太平洋画会創立会員。06 年関西美術院教授。19 − 21 年渡欧。30 − 41 年京都高等工芸学校教授。京都で没、69 歳。

永地秀太《静物》

渡欧中に身に付けた画家の目線

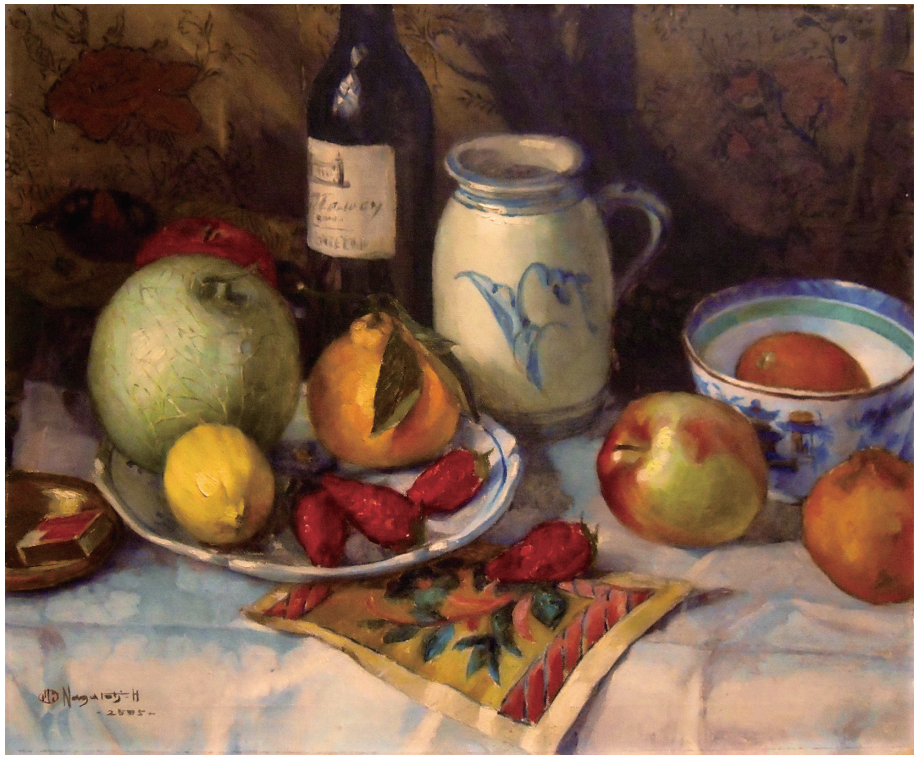
秀太の静物画は、好きな画風のため機会を逃さず鑑賞してきた。作品を見るたびに興味が湧き、自ずと私なりの見方も備わってきた。秀太の静物画が初めて展覧会に発表されたのは、明治三八年第四回太平洋画会展であるが、当時はいずれの背景も無地でこだわりは見られない。ところが大正九年文部省在外研究員として渡欧し、同一一年帰国以後の帝展や太平洋画会展出品作は、静物画の背景に花柄模様を使い始めていた。気づいた当初はカーテンを描いているものと考えていた。しかしその後の調査で絵柄のあるカーテンと思えた布は、更紗の可能性が高いことがわかった。現に第五回帝展に《更紗の前》を出品していた。秀太が滞欧中に更紗を見付け入手したとしても不思議ではない。画家の目を持ってすれば、見付けることは容易なことである。

一方、手元の作品を見ると、秀太にしては珍しく沢山の果物やワインの瓶、水差しなどを描いている。そのために背景を意図的に暗くし、更紗模様の背景を不明瞭に描いたと思われる。

ところで、以前ご遺族に照会した際、永地博正氏夫人から長文の手紙が届いた。手紙には「所蔵品は山口県立美術館に寄贈したこと。義母から聞いた話によると、秀太が山口に疎開する際に東京から送った作品すべてが紛失したこと。流通経路は不明であるが、何故か秀太の作品が中国で現在市場に出回っているらしいこと」など関係者のみが知り得る貴重な情報が含まれていた。

佐々木征（千葉県船橋市）

永地秀太《 静物 》
油彩・キャンバス　50.0 × 61.0cm　1935 年
Nagatochi Hideta *Still Life*



永地秀太（ながとち・ひでた／1873 － 1942 年）
山口県生れ。松岡寿に師事。明治美術会教場で学ぶ。1902 年太平洋画会創立会員。09 年文展で褒状。13 年文展で三等賞。20 年文部省在外研究員として海外視察。帰国後、東京高等工芸学校教授。東京で没、69 歳。

田中寅三《海の風景》

瀕死の状態から奇跡的に修復できた風景画

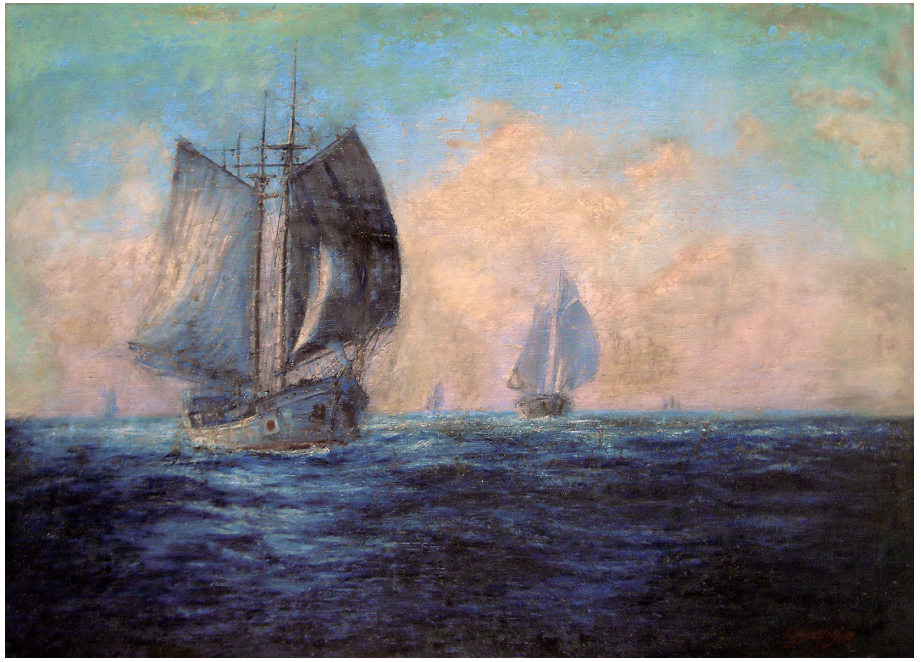
この絵との出合いは、私にとって当初から作者がわかっていた数少ないケースである。しかしながら、購入に当たっては、迷った末に決めた記憶がある。それは何故かと言えば、絵の画面全体に絵の具の剥離が見られ、輸送するだけでもさらに剥離が進む最悪の状態であった。しかも飾って楽しむには、修復しなければならないという難題を抱えていた。私が購入しなければ、剥離が進み、最終的には粗大ゴミとなることを危惧し、清水の舞台から飛び下りる気持ちで購入を決めた。私は直ぐに思い切って修復に出すことにした。その甲斐あって、今では立派に元の姿に戻り、自宅玄関に安住の地を見付け家人を楽しませている。

因みにこの絵は、昭和一七年に日動画廊において開催した田中寅三「海と船油絵展」に出品された《海の風景》三〇号である。寅三作品については、遺族から平成七年に一〇〇点（資料含む）を超える油彩等が一括して松戸市に寄贈されている。図録によると、参考図版の中に《海の風景》が掲載されていることから、個展の際に売却され、画家の手元を離れたと思われる。

この絵と向き合うとき、戦争中に二年連続して「海の船油絵展」を開いた寅三の心中を知りたいとの思いが湧いてくる。一方、この絵との出合いで少し無理をしたことで、画家の渾身の作品を次の世代に橋渡しする手助けをした気分である。

佐々木征（千葉県船橋市）

田中寅三《 海の風景 》
油彩・キャンバス　65.5 × 90.5cm　1942 年
Tanaka Torazo *Seascape*



田中寅三（たなか・とらぞう／1878 － 1961 年）
愛媛県生れ。1895 年明治美術学校に学ぶ。96 年天真道場に学ぶ。97 年白馬会展出品。99 年東京美術学校西洋画科卒。1938 年から日動画廊ほかで個展。松戸で没、83 歳。

小柴錦侍《（二）パルタージュ》

目が覚めるような綺麗な絵に挑戦した画家

今完成したと見紛うばかりの色鮮やかな室内風景画に出会った。このように隅々まで緻密で絵の具の発色がずば抜けた絵の作者は、これまで一人だけ出会った記憶がある。作者のことはさておき、絵の構図では、花柄模様のソファーに座っている赤色のワンピースをまとった少女が最初に目に付く。座り方もソファーの端に寄りかかり両肘を端において、何やら犬に話しかけているようにも取れるポーズである。二匹の犬は餌をねだっているのか、二匹とも少女の目をじっと見ている様子だ。少女の膝上には餌なのか自分用のお菓子らしきものが、器に入って載っている。他には少女のそばにクッションらしき丸いもの、背景の端には額の一部が描かれ全体としてすっきりした構図である。

私は額裏面の小柴の墨書きと「(*)(二)パルターシュ」と書かれた古いシールを見て、小柴錦侍の作品ではと考えた。錦侍については、以前に画風や履歴を調べており、私なりに絵の特徴を記憶していた。早速、以前の調査で知りえた磯谷商店の上林喜美子氏経由でご遺族の天木ヨシ子（旧姓小柴）氏に照会したところ、錦侍の作品であることが判明した。制作年は不明とのことであったため、昭和一一年の近作油絵展覧会目録を国立国会図書館で確認するも、残念ながら出展の事実はなかった。制作年の確認作業は、今後、私に課せられた宿題と思い、楽しみつつ調査を続けるつもりでいる。

（*註）額裏面のシールには「パルターシュ」と書かれているが、それでは意味が定かでないこと、また少女と犬たちがかもしだす雰囲気が、共有や分かち合いを意味するフランス語 partage を思わせることから、画題を「パルタージュ」に変更している。

佐々木征（千葉県船橋市）

小柴錦侍《（二）パルタージュ》
油彩・キャンバス　60.5 × 73.0cm　制作年不詳
Koshiba Kinji　*(II) Partage*

小柴錦侍（こしば・きんじ／1889 − 1961 年）
東京生れ。1911 年東京高等工芸学校卒。渡欧、ルーヴル美術館学校、アカデミー・ランソンに学ぶ。20 年帰国。20、22、26 年帝展で特選。40 年創元会創立会員。東京で没、71 歳。

作者不詳（K・Nサイン）《海景》

作者が誰であれ、秀逸な海景描写に脱帽

この絵を見た瞬間、頭が真っ白になるほどの衝撃を受けた。私の蒐集歴は決して長くはないが、絶対に忘れない出会いであった。それはまず絵の構図や描写である。画面中央の岩、手前の下部左側から上方向に連なる海岸線。岩場に打ち寄せる波などを克明に描写し、画面右側は上部に向かって靄がかかっているような描き方は絶妙である。この絵は、現場で制作し、高い技量がなければ、これほどの臨場感を鑑賞者に与えることはできないであろう。私は図録で見た中村勝治郎展出品作の《風景》のサインに似ていることから、勝治郎作品の可能性を期待した。

私は意を決し、展覧会歴のある奈良県立美術館に照会した。その結果、松川綾子氏（学芸員）から貴重なアドバイスを受けた。それは「中村の海景画と断定できる作例が少ないこと。手元の作品はとてもよく描けていること。俯瞰視を取り入れた劇的な構図や、大気遠近法を用いた視界を遠方へと誘うかのような開けた空間表現、白く渦巻く波の躍動感や光を浴びた岩肌の色彩感覚など、いずれも当方が確認した中村の作品には見られない高い技量が発揮されております」とあった。

私は「中村没後の回顧展に出品された作品の中には友人達が手を加えて完成させた作品もあったかもしれません」などの松川氏のアドバイスを参考に検討した結果、明治美術会、白馬会の双方で学んだ長原孝太郎に着目し、白馬会展出品作の可能性を期待し調査を続けることにした。

佐々木征（千葉県船橋市）

作者不詳（K・Nサイン）《海景》
油彩・板　41.0 × 31.6cm　明治期
Unkown Artist (K. N.) *Seascape*

水木伸一《ベニス風景》
―蘇生して初めて見た景色―

身辺雑話である。

第二次大戦末期、小学校低学年であった私は父の生家である四国の田舎へ疎開した。間もなく私はジフテリアに感染、親の懸命な努力の結果、やっと血清を入手し一命をとりとめることが出来た。

自宅の病室で息を吹き返した時、最初に目に映ったのが此のベニスの絵である。その時この景色の場所に行ってみたいものだとつくづく思ったものである。ところが実際に景色を眺めることが出来たのは六〇歳も半ばになってからであるから情けない話である。イタリアの食事は美味で、景観も素晴らしく、時にハッとするような美女にもお目にかかれ、胃袋、脳細胞ともども満足した。しかしベニスの狭い水路をゴンドラで通過する時のなんとも生臭い匂いには閉口した。矢張り美しいモノには余り近づかない方が良いということだろうか。アドリア海の女王と称されるこの水上都市もまた同じか？

宇都宮義文（千葉県流山市）

水木伸一《ベニス風景》
油彩・キャンバス　43.0 × 37.0cm　1922 – 23 年頃
Mizuki Shinichi *View in Venice*

水木伸一（みずき・しんいち／1892 – 1988 年）
松山市生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。1914、15 年第 1 回、第 2 回二科会展に入選。15 – 20 年院展洋画部に出品。第 3 回院展で奨励賞。渡欧。21 年光風会展で今村奨励賞。日本水彩画会会員。88 年没、96 歳。

前田寛治《婦人像》

主観的リアリズムなるものに魅せられて

絵画のコレクションを始めた頃は、前田寛治について名前だけは知っているという程度で、画歴や人間像はもちろん作品の具体的イメージも何も持っていませんでした。しかし、その後「一九三〇年協会」の創立メンバーで、〝パリの豚児たち〟と称し、フォービズムの里見勝蔵や佐伯祐三らと深く交友していたこと、そして、その中で独自の〝主観的リアリズム〟を追求し、骨太な存在感のある構成と青、赤褐色、黒を基調とした色合いの重厚な作風を確立したことを知りました。爾来、前田寛治の作品を一点持ちたいと願うようになりました。夢はかなわず一〇年近くが過ぎていましたが、ある日、不意に地元の画廊主から、「かなり深くかかわっていたコレクターが急逝され、そのご遺族から預かった作品だが」と言ってこの絵を見せられました。初見では、自分の抱いていたイメージにはシンクロナイズせず、弱くてぼやけた感じの絵だとの印象でした。しかし身近に掛けて久しく接しているうちに、当方の頭の中が変えられたようです。今ではこの比較的速い筆使いと薄塗りで、まるで油彩によるデッサンのような表現がかえってモデルのやや控え目で和らかな情感を描き捕っているように思われ、画家の卓越したセンス（主観的リアリズム）を感じるようになれたと嬉しく思っています。

谷　吉雄（石川県白山市）

前田寛治《 婦人像 》
油彩・キャンバスボード　22.0 × 17.5cm　1925 年
Maeta Kanji *Portrait of a Woman*

前田寛治（まえた・かんじ／1896 － 1930 年）
鳥取県生れ。1915 年白馬会葵橋洋画研究所に学ぶ。21 年東京美術学校西洋画科卒。二科会展、帝展に入選。22 － 25 年渡仏。25、27 年帝展で特選。26 年「一九三〇年協会」を創立。東京で没、33 歳。

国吉康雄《四つの桃》

桃にみる国吉の孤愁と静かな強い意志

コレクションを始めてまだ間もない頃で、大川コレクションに衝撃を受け、妙な高揚感に心をゆさぶられて酔ったような情態の時に、まだ二回程しか訪れていない地元の画廊へ足を踏み入れると小部屋の壁にこの作品が掛けてありました。この絵の第一印象は「なんとも硬そうで色も悪く、世界一不味そうな桃だなあ。でもこんな購入意欲をそそらない作品ならクニヨシでも購えるかも知れない……」と不遜で傲慢なものでした。同じような境遇のフジタの作品はもちろん、クニヨシの女性像などは逆立ちしても無理なのだからという、負け惜しみの裏返しのような思いにも背中を押されたようでした。その後ずっと自宅の壁に掛けていましたが、この不味そうな四つの桃に対する理解は一向に深まらず、時々視線を向けても確かな手ごたえが感じられずもどかしい思いでいました。その後、大分経って、当時の世界恐慌から日米開戦という厳しい状況下で、困難な立場に置かれた国吉が抱いていたであろう、デラシネとしての存在の不安（危うさ）とそこからくる深い孤愁を表しているのだろうと想像しました。さらに最近では、布からこぼれて出ている右端の桃を見ると、ただ孤愁を漂わせているだけでなく、その心の内にこのアメリカの地で生き抜いてゆくという強い意志（反骨の思い）を深く静かに抱いているように思えてきました。

谷　吉雄（石川県白山市）

国吉康雄《 四つの桃 》
油彩・キャンバス　30.8 × 41.0cm　1935 年
Kuniyoshi Yasuo *Four Peaches*

国吉康雄（くによし・やすお／1889 − 1953 年）
岡山市生れ。渡米。ロサンゼルス美術学校、1916 年ニューヨークのアート・スチューデンツ・リーグに学ぶ。29 年ニューヨーク近代美術館の 19 人の現代アメリカ作家に選抜。48 年ホイットニー美術館で回顧展。NY で没、63 歳。

遠山五郎《夫人像》

赤いシャンタユにノックアウトされて

「藝林」時代の梅野隆氏（初代館長）が長野県東御市（旧北御牧村）に梅野記念絵画館の設立を決意され、その開館に向けて作られた図録に遠山五郎の作品と画家への熱い思いが述べられていてこの画家のことが強く印象に残りました。

またこの少し後に京都の画廊で片多徳郎の小品を求めた際、画廊主から片多徳郎・遠山五郎展（一九七九年、北九州市立美術館）の図録を教示され、より一層、遠山五郎を意識するようになりました。ところが、こともあろうに『わの会の眼』図録に、代表作中の代表作《赤いシャンタユ》が載っており、その完成度の高さと素晴らしさにノックアウトされてしまいました。この作品は、このようないきさつのなか、東京の信頼する画商から紹介されて求めたものです。

《赤いシャンタユ》のような極めて完成度の高い代表作を実見してしまうと、何も書けることが見つかりません。それでも、遺作が少ない遠山五郎の一点として記録に残しておきたいという思いから勇気を出して出品しました。

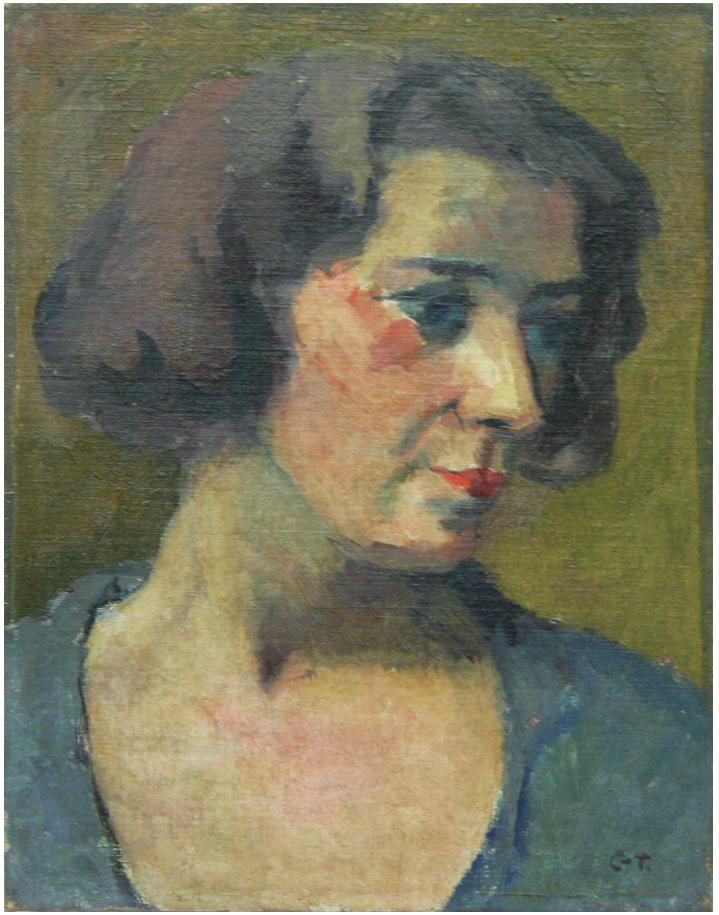
描かれている夫人が、モデルとしての状況から日常に戻ろうとする一瞬に垣間見せた表情を捕えているように思います。思慮深く穏やかながら、内に秘めた意志の強さを感じます。そのうえ潤いのある和らかな情感までも感得され、夫人の魅力を十分に表出しているように思いました。習作のレベルかも知れませんが味わいのある作品だと思っています。

谷　吉雄（石川県白山市）

遠山五郎《 夫人像 》

油彩・キャンバスボード　31.0 × 24.0cm　制作年不詳

Toyama Goro *Portrait of a Woman*



遠山五郎（とおやま・ごろう／1888 － 1928 年）

福岡生れ。1911 年文展初入選、14 年東京美術学校卒。同年渡米。19 年ニューヨークに学ぶ。20 － 22 年渡欧。ゲランに師事。仏官展に入選。22 年帝展で特選。23 年光風会会員。中村彝の肖像画を描く。東京で没、40 歳。

西脇順三郎《静物》

文学（詩）と視覚芸術の融合を体現した人

近代詩の先駆者であり、現代を代表する詩人としての西脇順三郎は識っていましたが、絵画制作については、戦時中故郷の小千谷に疎開していた時に水彩画を描いていたぐらいの知識しかありませんでした。

ところが、驚いたことに神奈川県立近代美術館編の『近代日本芸術家列伝』に西脇が取り上げられており、その西脇芸術の全体像における画家としての側面が高く評価されていました。文学（詩や評論）と美術（絵）がお互い影響し合って、いわば車の両輪のように西脇芸術を造り上げていたとの評価でした。さらに、より一層西脇に意識が向かいはじめた頃、純粋でストイックな独自の審美眼で蒐められた珠玉の作品を世に問われた、O氏コレクション展Ⅱの図録を入手しました。この中に西脇の油彩で《スモモ》というタイトルのブルーを基調とした透明で詩情あふれる静物画が載っており、記憶にしっかり焼き付けられました。それから数年して某画廊の販売カタログの中にこの絵を見付け思わず申し込み入手しました。この作品は《スモモ》と同じブルーを基調としているものの透明感や輝きは抑えられています。しかしこの作品にも象徴詩人としての豊かな想像力とデッサンの確かさで詩情をしっかり描き表していて、抑制が効いたロマンの香り高い作品に仕上げていると感じました。

谷　吉雄（石川県白山市）

西脇順三郎《 静物 》
油彩・キャンバスボード　38.0 × 45.5cm　制作年不詳
Nishiwaki Junzaburo *Still Life*

西脇順三郎（にしわき・じゅんざぶろう／1894 － 1982 年）
新潟県生れ。藤島武二に師事。1917 年慶應義塾大学卒。渡英。文学活動を行い、海外文学の紹介に努める。近代詩に足跡を残した。61 年日本芸術院会員。71 年文化功労賞。詩人の余技をこえた絵画を制作した。新潟で没、88 歳。

御厨純一《風景》

海軍従軍画家として

昭和一二（一九三七）年の日中戦争の勃発から軍の招集で多くの画家が従軍画家として戦地に向かいました。彼らは写真とはまた別な宣伝効果を期待した絵画を描いていました。その中には藤田嗣治、小磯良平などがいました。二〇一二年には東京国立近代美術館が六〇周年を迎え、日本近代美術の一〇〇年展が開催され御厨純一は藤田嗣治と展示されました。この作品は和田英作や小林万吾らの風景画的趣向に依りながら、暗く重みのある画面を構成しています。

高木巧治（岡山県勝田郡勝央町）

御厨純一《 風景 》
油彩・板　25.0 × 32.0cm　1924 年
Mikuriya Junichi *Landscape*

御厨純一（みくりや・じゅんいち／1887 − 1948 年）
佐賀市生れ。白馬会第二研究所に通う。1912 年東京美術学校西洋画科卒。20 年帝展に初入選。26 − 28 年渡仏。29 年第一美術協会会員。37 年海洋美術会創立会員。従軍画家。東京で没、60 歳。

原　勝郎《森の中の母子》

画家の感性を描いた絵

渡欧後、比較的初期の一九三〇年頃の作と思います。フランスで売りに出たもので新発見の作品になります。

季節は春でしょうか？　森の中に温かで気持ちの良い春風が吹いているように見えます。森で遊ぶ子供とそれを見守る母親は穏やかな森の空気に包まれています。

滞欧期の水彩画に桜を描いた《春》（一九二二―三九年頃）という作品がありますが雰囲気が似ています。

その後の建物を中心とした作品と異なる、何か画家の水彩画に通じるような伸びやかさと幻想性を感じます。帰国後、森の木の中に分け入り森の本質をつかみ取ろうとするような風景画を残しましたが、この作品は反対に俯瞰的に風景を捉えているように見えます。森という同じ題材の捉え方の違いが私の興味をそそります。

一九八〇年に銀座の現代画廊で開催された遺作展の案内状に麻生三郎が次のように書いています。

「巴里で描いていた風景もそうだが日本での仕事も一貫して太い骨の強い自然な土着のある絵を描いた。大切なものの存在している絵だ。いま、原さんの展を開くということはよいことなのだ。忘れてはならぬものに気がつくということになろうというものだ」

原勝郎という優れた画家が亡くなって五〇年（二〇一六年現在）、麻生画伯が言っているように再び展覧会でまとまった作品を見たい、と思うこの頃です。

田村和司（京都府宇治市）

原　勝郎《 森の中の母子 》
油彩・キャンバス　63.0 × 78.0cm　1930 年頃？
Hara Katsuro　*Mother and Her Children in the Woods*

原　勝郎（はら・かつろう／ 1889 ― 1966 年）
千葉県大網白里町生れ。葵橋洋画研究所に学ぶ。1918 年ハワイに渡り、20 年渡米、22 年渡欧。24 年以降帰国する 39 年までサロン・ドートンヌ展に出品。42 年日動画廊で個展。49 年新樹会会員。50 年木内克と北荘画廊で二人展。東京で没、77 歳。

川上涼花《風景》

静かな生の境地

この絵の効用？は心に落ち着きをもたらしてくれることです。毎日、時間に追われあたふたと生活している時、ふと、この絵を見ると絵が語りかけてきます。

「もう少しゆっくりと穏やかに過ごしましょう」と。

亡くなる二年前の一九一九年、涼花三二歳の作です。恐らく中野区東中野のアトリエ近くの風景と思われます。人に見せるために描いたのではなく自分の心の赴くままに筆を走らせています。その自然さがたまらなく好きです。平凡のようで非凡な絵と思います。

涼花のまとまった展覧会は一九三六年の遺作展後、長い間、開かれませんでした。あまりにも残された作品が少ないことも要因と思いますが、二〇〇二年「川上涼花という画家がいた 萬鉄五郎、岸田劉生、川上涼花が向きあった自然／風景展」が開催されました。当時、よくぞ取り上げてくれたと拍手したことを覚えています。図録には、「わずかに一九点わかっている全ての作品である」と記されています。判明していない作品は他にもあると思いますがこの作品が二〇点目になります。

涼花の風景画について書かれた図録の解説を紹介したいと思います。

「劉生、萬の風景画には、画家自身の強い自我意識がある。対象に挑みかかっていくような強さがある。涼花は自然に挑まず、ひたすら受け入れることを黙々とつづけていたように思われる」

涼花、風景画の魅力です。

田村和司（京都府宇治市）

川上涼花《風景》
水彩・紙　30.0 × 44.0cm　1919 年
Kawakami Ryoka *Scenery*

川上涼花（かわかみ・りょうか／1887 ― 1921 年）
東京生れ。1905 年太平洋画会研究所に学ぶ。1912 年ヒュウザン会（後のフュウザン会）結成に参加。16 年斎藤与里らと日本美術家協会を創立。17 年二科展に初入選。21 年没、33 歳。

広幡　憲《浮標》

幻の抽象画家の傑作が今、よみがえる！

広幡憲はこの絵を一九四八年に描き、その五カ月後に逝ってしまった。享年三七歳。翌年の一九四九年に遺作展が日本橋・北荘画廊で開催され、そこの主であった菅貢氏がこの作品を買い取った。そして三六年経った一九八五年に岩本昭氏（『わたし流美術館』の著者）が菅氏から譲り受け、それを私が一三年間の懇願の末、二〇〇九年ようやく入手できたのである。広幡とはご近所さんであった母も懐かしがって喜んでくれた。人は広幡を「幻の抽象画家」と呼ぶ。窪島誠一郎氏が言うように夭折六傑（村山槐多、関根正二、松本竣介、靉光、野田英夫、広幡憲）の一人であり、秋田市立千秋美術館で回顧展が開催された二〇〇二年現在で確認されている作品はわずか二一点、そのうち本丸の抽象作品は七点しか残っていない。この《浮標》がその中の一点であり、広幡独自の純粋ともいえる有機的形態による抽象表現に到達した代表作であったのだ。

《浮標》は左脳と右脳を切なく優しくスティミュレイトしてくれる。浮いている標とは、自らの画業を模索していた広幡の心境であったろう。擬人化しているような独自の有機的な形態は広幡の自画像にも見え、定まらない流動的な矢印もまた然りである。また、この作品から感じる不思議な感覚、窪島誠一郎氏は薄鈍（うすにび）色のモダニズムと称して、このように評論している……「薄鈍色とは雪に閉ざされた地方の人が、春が来るか来ないかのころに目にし、感じる色。その向こうには黎明感がある。何か切なくて苦しげなものを画肌の底に塗り込めたような薄鈍色の光が、広幡の絵の奥には隠されている」と。

平園賢一（神奈川県平塚市）

広幡　憲《浮標》
油彩・キャンバス　24.3 × 33.4cm　1948 年
Hirohata Ken *A Buoy*

広幡　憲（ひろはた・けん／1911 － 1948 年）
秋田県生れ。日本大学中退。プロレタリア美術研究所に学ぶ。藤田嗣治の助手を務める。1937 年二科展に初入選。39 年絶対象派協会結成に参加。九室会に参加。46 年二科会特待。同年、自由美術家協会に出品。立川で没、37 歳。

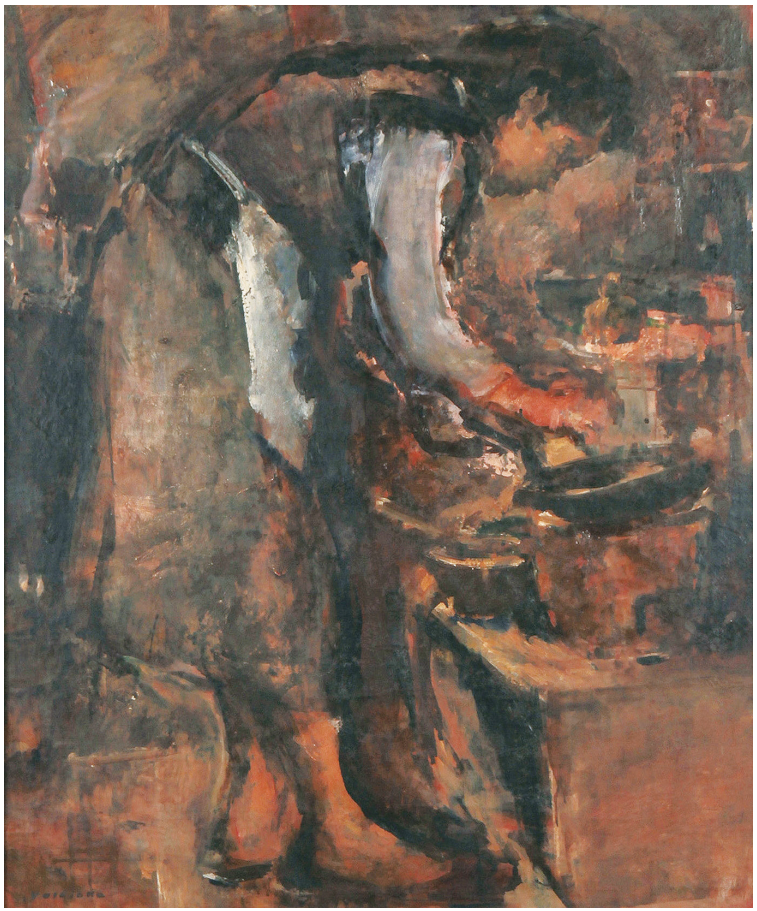
吉岡　憲《煮もの》

名品！　吉岡憲のすべてがこの一枚にある

吉岡憲は、洲之内徹『気まぐれ美術館』が発掘顕彰した作家の一人ともいえるだろう。物故コレクターの多くが一度は吉岡熱にうなされる。その熱を下げるには作品をゲットするしかないが、そうはうまくはいかない。二〇〇三年夏、遺族・関係者の執念で旧いのは画廊（神保町）で待望の「吉岡憲の画業展」が開催された。この絵は展覧会を開催する際に画廊主の猪羽さんが某家で新発見した伝説の傑作である。吉岡は一九五六年に四〇歳の若さで亡くなったので、回顧展まで四七年の歳月が経ってしまったわけである。吉岡ほどの実力者ですらこのありさまである。図録の中で窪島誠一郎氏は「吉岡憲の持っていたその時代性、その淡色と濃色とが巧みに入り混じった底光りのする不思議な色彩と画肌、余人を寄せ付けないスピード感と対象把握に優れたデッサンには、あの時代性でなければ描けなかった懐かしい絵の匂いがある。時流におもねらず、自我をまげず、貧苦をいとわず、ただ脇目もふらず画布の上における孤独な自己表現を目指した融通のきかなさこそが、吉岡憲のような真の意味での日本的洋画家を生み出した源泉であったのではないか」と述べている。その通りである。この絵のモデルは夫人の菊さんである。この回顧展を病床で聞いた菊夫人は喜ばれ、会期中に永眠されたという。合掌。

平園賢一（神奈川県平塚市）

吉岡　憲《煮もの》
油彩・キャンバス　72.7 × 60.6cm　1951 年
Yoshioka Ken *Cooking Food*



吉岡　憲（よしおか・けん／1915 ― 1956 年）
東京生れ。川端画学校に学ぶ。1935 年ハルピンに滞在。聖ウラジミール専門学校卒。39 年帰国。43 年独立展で独立賞。48 年独立美術協会員。49 年日本大学芸術学部講師。東京で没、40 歳。